

学生生活への不安、不満と中退に関する現状

意欲が低い状態の学生は、その内面にどのような不安や悩みを抱えているのだろうか。入学した大学の入試難易度や志望順位にかかわらず学生生活に不安や不満を感じる学生は存在する。そうした学生を見逃し放置してしまうと、不登校や中退に至ることもある。入学直後の意識や中退に関する事情など、データを見ながら学生の現状を捉える。

中退の最大要因は学習意欲の喪失

受け入れた学生を社会で通用する人材に育て上げ、確実に送り出すことが大学の責任だと考えると、中退は最も回避したい帰結といえるだろう。しかし、実際には、大学の設置形態にかかわらず、毎年、一定の中退者が出ている。

茨城大学保健管理センターの内田千

代子准教授（現在）が行った2004年の調査によれば、国立大学の学生の中退率は1.6%だった。仮に今後も学年にかかわらず同じ中退率であるとすれば、2011年度の国立大学の入学者約10万人のうち約1600人が1年間に中退し、4年間では約6400人が中退する計算になる。

一方、私立大学の中退率は、日本私立学校振興・共済事業団による2005年の調査で2.9%という結果が公表さ

れている。同じく現在の学生数で試算すると、2011年度の私立大学入学者約48万人のうち約1万4000人が1年間に中退、4年間では約5万6000人が中退することになる。

図表1は、中退の原因について、2008年5月から2009年10月にNPO法人NEWVERYが高等教育機関中

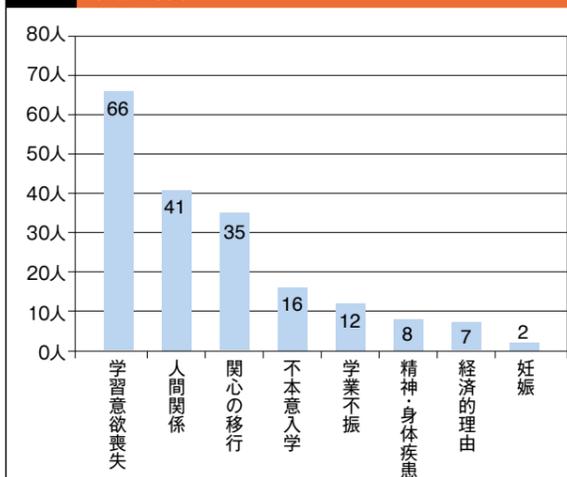
退者にアンケートおよびインタビュー調査した結果だ。NEWVERYは、「社会的弱者への転落につながる」という問題意識で中退を捉え、予防のための提案を行う「中退予防研究所」を運営している。この調査によると、中退の原因として最も多いのは「学習意欲喪失」、次いで「人間関係」となっている。

入学時は各難易度帯で専門や語学に不安

図表1で確認した中退要因の芽が、入学直後の学生にどのような形で潜在しているか、図表2の進研アドの調査結果で見ることができる。この調査は、2011年度の大学・短大の新生を対象に実施。入学直後、いくつかの項目について、どの程度不安を感じているか聞いた。「とても不安を感じる」「まあ不安を感じる」と答えた学生の割合の合計を、大学の入試難易度別に示している。

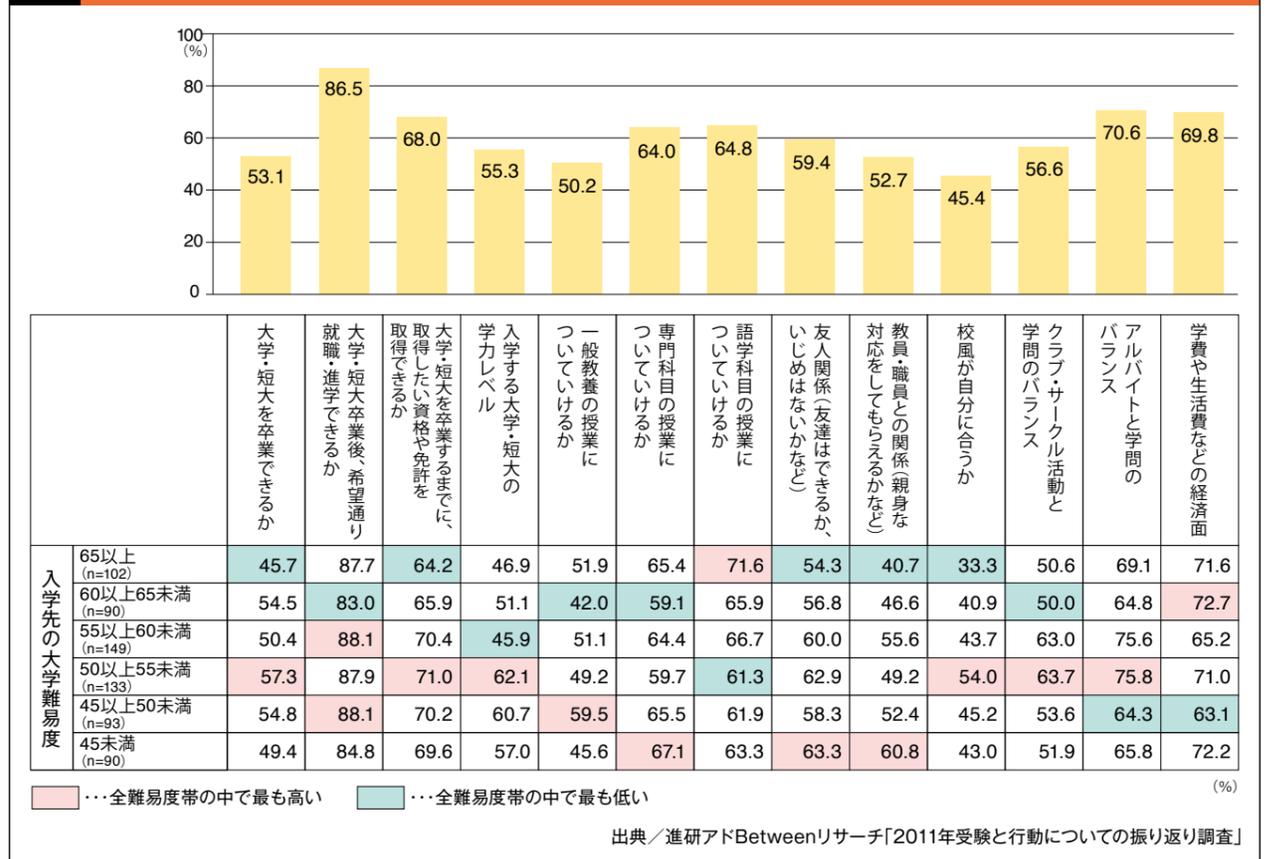
図表中、最初の3項目は、卒業・就職という「出口」にかかわる不安を示す。その中の「大学・短大卒業後、希望通り就職・進学できるか」（86.5%）は、すべての難易度で最も不安の割合が高くなっている。大学卒業後の進路未定者が10万7千人を超える（文部科学省2011年度「学校基本調査」による）という社会情勢が、学生の心理

図表1 中退の原因



出典/日本中退予防研究所「中退経験者インタビューレポート」

図表2 大学入学直後の不安

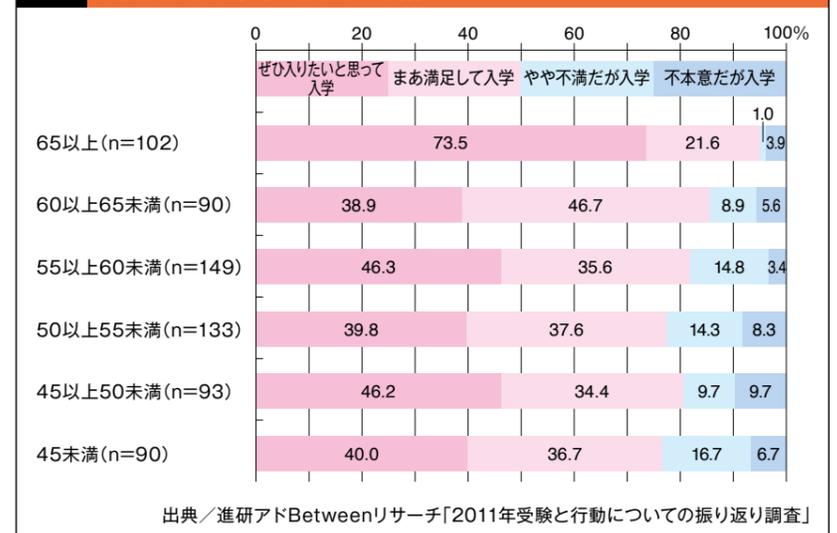


に大きな影を落としていることがうかがえる。

「入学する大学・短大の学力レベル」から「語学科目の授業についていけるか」までの4項目は、図表1の最大の中退要因である「学習意欲喪失」につながる学習関連の不安の度合いである。専門科目、語学科目についていけるか不安を感じている新生はいずれも65%近くに上る。他の2項目も含め、入試難易度にかかわらず多くの新生が、大学での学習や学力レベルに不安を覚えている。

「友人関係」から「校風が自分に合うか」までの3項目は、図表1の中退要因の「人間関係」を具体的に展開した内容として見ることができる。「友人関係（友達とはできるか、いじめはないかなど）」は、6割近くの新入生にとっ

図表3 入試難易度と入学時の満足度との関係

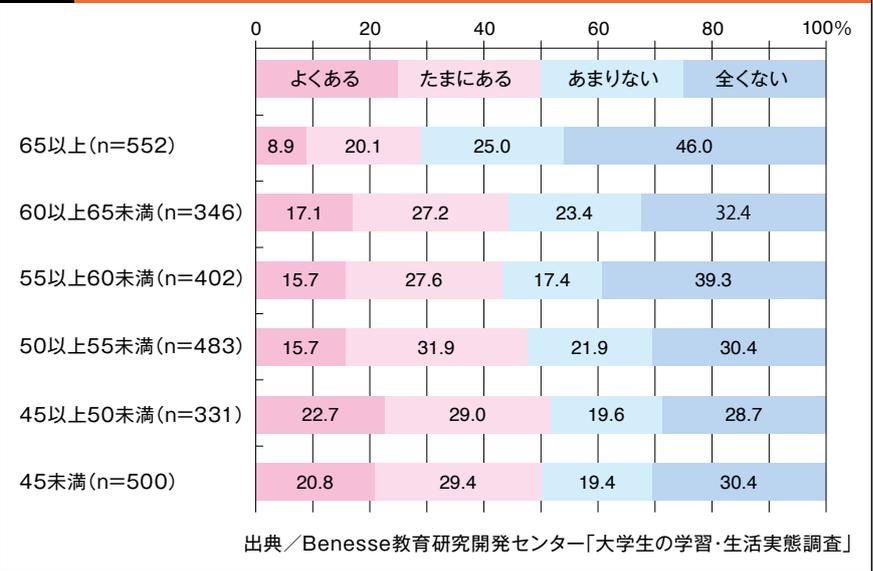


ての不安材料となっている。かつての大学生であれば想定する必要がなかったこのような不安についても、中退に

つながらないよう、大学は正面から向き合い丁寧なケアであたる必要があるだろう。

図表中、最後の2つの項目は、経済面にかかわる不安を示している。両項目とも7割前後に達し、「希望通り就職・進学できるか」に次いで高い。特に学生の本分である学問ですら、アルバイトとのバランスを考慮せざるを得ない学生がこれだけ存在する状況は注視に値する。学生の経済的問題に対応するための奨学金や授業料減免などの制度整備は、本特集で扱わないが、学習機会の保障という観点から、大学はこの実態を認識しておく必要があると思う。

図表4 入試難易度と大学適応度との関係（「他の大学に入り直したい」と思うことがあるか）



配慮が求められる 中位難易度帯の意識

5ページの図表3は入学時の満足度を、図表4は他大学に入り直したいと思う度合いを、それぞれ調査したものだ。いずれも大学の入試難易度別に結果をまとめている。

「60以上65未満」から「45未満」の5つの難易度帯を見ると、難易度帯と、満足度および大学適応度には相関はない。どの難易度帯にも、「不本意だが入学した」学生や、「他の大学に再入学したいと思うことがある」学生が、一定数存在している。

唯一、「65以上」の学生は、他の難易度帯と比べるとそう思っている学生が少ない。ただし、他大学への再入学を考えることが「よくある」「たまにある」学生が29%いるという結果に注目したい。「65以上」の層であっても、入学時の不満や大学への不適応と

いった問題は無視できないと考えたほうがよい。

図表3の「ぜひ入りたい」と「まあ満足」の合計割合が、「50以上55未満」で、すぐ上の難易度帯およびすぐ下の難易度帯よりも低く、「45未満」の入学満足度と同程度である点に、着目しておきたい。図表2でも、13項目それぞれについて、不安視する割合が最も強い入試難易度帯を見ると、半数近い6項目を「50以上55未満」が占めている。

これは、この難易度帯の学生が、学力レベルに基づく併願校の中から入学先を決める傾向が特に強いことと関係がありそうだ。積極的な理由で大学を選んだとは言いがたく、帰属意識を持ちにくい層と言える。ある意味、入試難易度がより低い大学以上に、学習への動機づけや不安の払拭、帰属意識の

向上のための施策を必要としていると言えるかもしれない。

最終的な満足度の 向上に向けて

ここまで、入試難易度に関係なく共通する入学時の不安材料や、中位の難易度帯ならではの留意点について見てきた。

「授業についていけるか」「友達ができるか」といった学生の不安に対し、「個人の問題であり対処の必要はない」と言いきれない大学は、今やないはずだ。自学の学生が感じている不安を察知し、学生一人ひとりに寄り添う支援によって意欲と適応度を上げ、社会で活躍できる自立した人材として送り出す、そのための具体的な施策こそが求められている。

調査概要

Betweenリサーチ「2011年受験と行動についての振り返り調査」

- 調査主体: 進研アド
- 調査方法: インターネット調査 ■調査時期: 2011年4~5月
- 調査対象: 2011年3月高校卒業業者(福島・宮城・岩手の3県を除く全国)
- 有効回答数: 1039

「大学生の学習・生活実態調査」

- 調査主体: Benesse教育研究開発センター
- 調査方法: インターネット調査 ■調査時期: 2008年10月
- 調査対象: 全国の大学1~4年生(留学生・社会人経験者は除く)
- 有効回答数: 4070